

奈良田方言アクセントについて

奥 田 邦 男

1 は じ め に

山梨県の仙境、奈良田部落は、興味あるアクセントを有する地域として早くから注目されてきた。ここでは、生成音韻論の立場から、奈良田のアクセントについての従来の解釈を批判し、奈良田方言とその近隣の方言はともに、基本的には同じ基底アクセント表示・アクセント規則をもっており、音声表示の著しい相違はピッチ顕示規則の違いによることを論じ、さらに、世代の相違によるアクセントの変化の問題について考察する。

2 従来の解釈とその批判

平山氏（1957, p.264 f.）によれば、奈良田アクセントは、第一種（京阪式）から第二種（東京式）を経て、更に第三種（京阪式）に変わったもので、甲府方言などと比較して、起伏型（有核）に対応する語はアクセント核の位置がそれぞれ1モーラずつ後にずれており、平板型（無核）に対応する語は頭高型に変化していて、平板型のない起伏型だけの体系を作っていると解釈されている。

この立場から奈良田アクセントと甲府・東京アクセントの型の対応をまとめれば（表1）のようになる。

表 1

モーラ 型	奈 良 田				甲 府 ・ 東 京				語 例			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
(a)	oː	oː	oːo	oːooo	o	oo	ooo	oooo	柄	牛	兎	鶏
(b)	oː	ooː	oooː	ooooː	oː	ooː	oooː	ooooː	絵	犬	鏡	金持
(c)		ooː	oooː	ooooː		oː	ooː	oooː	秋	心	青空	
(d)			ooːo	oooːo			oːoo	ooːoo		兎	朝顔	
(e)				ooːoo				oːooo			こうもり	

（表1）において、奈良田の場合、（a）は「頭高型」、（b）は後続の付属語の第1モーラが高くなる「尾高上型」、（c）は付属語が低く続く「尾高下型」、（d）および（e）は「中高型」と

呼ばれている。

さて、平山氏の音韻論的分析によれば、句頭の高ビッチは、もし残りのモーラが低ビッチであれば示差的、つまり頭高型アクセントであるとされる（e.g.  $\bar{\text{ニ}}\text{ワトリ}$ （／ $\bar{\text{ニ}}\text{ワトリ}$ ／））。また、もし句頭以外のモーラが高ビッチであれば、そのモーラにアクセント核があって、句頭の高ビッチは非示差的であるとされる（e.g.  $\bar{\text{ア}}\text{オゾラ}$ （／ $\bar{\text{ア}}\text{オゾラ}$ ／））。ところが、奈良田方言において頭高型と解釈されているもの（表1の（a））は、甲府・東京方言と同様、無核であるとしなければならない理由がいくつか考えられる。

- (a) いわゆる頭高型に属する語彙項目に有核の付属語が続く場合、その付属語のアクセントは消去されない。

$\bar{\text{ニ}}\text{ワトリマデ}$ （／ $\bar{\text{ニ}}\text{ワトリ}+\text{マデ}$ ／） vs.  $\bar{\text{ア}}\text{オゾラマデ}$ （／ $\bar{\text{ア}}\text{オゾラ}+\text{マデ}$ ／ →  
／ $\bar{\text{ア}}\text{オゾラ}+\text{マデ}$ ／） 参照。

- (b) いわゆる頭高型に属する語彙項目においては、語幹アクセントを引き寄せる付属語が続いても、アクセント核牽引の現象は見られない。

$\bar{\text{ア}}\text{ケナガラ}$ （／ $\bar{\text{ア}}\text{ケ}+\text{ナガラ}$ ／） vs.  $\bar{\text{タ}}\text{ベナガラ}$ （／ $\bar{\text{タ}}\text{ベ}+\text{ナガラ}$ ／ →  
／ $\bar{\text{タ}}\text{ベ}+\text{ナガラ}$ ／） 参照。

奈良田の文法規則の中には、「第2モーラが低ビッチであれば、自動的に句頭モーラが高ビッチになる。」という音声規則がいずれにしても必要であり、この規則によって無核語句（すなわち表1の（a））の第1モーラが音声的に高ビッチになることが説明できる。これは、甲府・東京方言などにおいて、「第2モーラが高ビッチであれば、自動的に句頭モーラが低ビッチになる。」という音声現象と鏡像（mirror image）関係にあると考えられる。

表1の奈良田の（a）型が、甲府・東京方言などと同様無核であるとすれば、残る起伏型（（b）～（e）型）の対応も非常に規則的であることがわかる。そこで、アクセント核の位置は、奈良田方言においては示差的な「あがりめ」を示し、甲府・東京方言においては示差的な「さがりめ」を示すと考えれば、平山氏の提案された／○○○＝ $\bar{\text{〃}}$ ／などという尾高上型（表1の（b））は不要となり、奈良田方言とその近隣の方言は、ともに、基本的には同じアクセントの基底表示をもっていると考えられる。すなわち、奈良田方言においては、「アクセント核の次のモーラが音声的に高ビッチとして顕示され」、甲府方言などにおいては、「アクセント核の前のモーラが音声的に高ビッチとして顕示される。」と解釈することによって、なぜ両方言間に著しい鏡像関係が見られるかも説明することができよう。

### 3 奈良田方言におけるピッチ顯示規則

奈良田アクセントの音声表示を正しく導き出すに必要なピッチ顯示規則は、次のような形で提案することができる。

#### (1) ピッチ顯示規則

##### a 低ピッチ付加

% X % → 低1

##### b 高ピッチ付加

低 → 高 /  $\left\{ \begin{array}{l} [+Acc] \text{ ————— } (i) \\ \% \text{ ————— 低 } X (ii) \end{array} \right\}$  (Xに高が含まれている場合は随意的)

##### c ピッチ調整

高 → 低 / 高 —————

(ただし、高は高ピッチモーラ、低は低ピッチモーラ、低1は低ピッチが1モーラ以上続くことをさす。)

例	基底表示	ピッチ顯示規則	音声表示
%	イカダ+カラ <sup>1</sup> %	→ (a, b ii)	→ イカダカラ
%	イカダ+マ <sup>1</sup> デ %	→ (a, b i, b ii)	→ イカダマデ
%	カ <sup>1</sup> ブト+マ <sup>1</sup> デ %	→ (a, b i)	→ カブトマデ
%	ココ <sup>1</sup> ロ+マデ %	→ (a, b i, b ii)	→ ココロマデ
%	カガミ <sup>1</sup> +カラ <sup>1</sup> %	→ (a, b i, b ii)	→ カガミカラ
%	イヌ <sup>1</sup> +ガ%ナク %	→ (a, b i, b ii, c)	→ イヌガナク (※イヌガナク)

これらの規則の適用を略述すれば、まず、規則(1a)によって、小文節中(小文節境界要素[%]で囲まれた領域)のモーラがすべて低ピッチになり、次いで規則(1b i)によって、アクセント核の次のモーラが高ピッチになる。次いで、もし小文節の第2モーラが低ピッチであれば、規則(1b ii)によって第1モーラが高ピッチになる。規則(1c)は、高ピッチモーラが二つ連続して生成されないよう、高に続く高を低に調整して、正しい音声表示を導き出すために必要である。

### 4 奈良田方言におけるアクセント交替規則

アクセント交替規則の例として、(1)複合名詞アクセント規則、(2)アクセント核牽引規則、(3)助詞「の」による尾高アクセントの無核化をとりあげた。このようなアクセント交替現象は、東京方言においても平行して見られ、両方言においては、基底アクセント表示だけでなく、アクセント交替規則

および表層アクセント表示も基本的には同一であることがわかる。既に上で述べたように、奈良田方言の音声表示と近隣方言のそれぞれが著しく相違するのは、文としてピッチ顕示規則の違いおよび散発的な例外に由来すると考えることができる。

## 5 少年層におけるアクセントの移行現象について

平山氏(1957, p.282)および稲垣氏(1957, p.61f.)によれば、奈良田方言においては、少年層のアクセントは成人層のそれより右へ1モーラ移行しているといわれる。しかしながら、報告された資料を詳しく検討してみると、奈良田における世代の相違による音声表示の対応も、ピッチ顕示規則の相違に由来すると考えられる。すなわち、少年層のピッチ顕示規則においては、上述の成人層の高ピッチ付加規則(1b)が(2b)のように変化したと考えられる。

$$(2b) \quad \text{低} \rightarrow \text{高} / \left\{ \begin{array}{l} [+Acc] (\text{低}) \text{——} (i) \\ \% \text{——} \text{低 } x \text{ (ii)} \end{array} \right\} \quad (x \text{ に高が含まれている場合は随意的})$$

すなわち、両世代の規則を比較すれば、成人層の場合には、(1b i)が低→高/[+Acc]——であるのに対して、少年層の場合には(2b i)が低→高/[+Acc] (低)——である。後者の規則において、わずかに(低)が加わったことによって、かなり顕著な音声表示の違いが生じたわけである。

---

### 付 記

本発表原稿を基にして、詳しく加筆した拙稿「奈良田アクセントの生成音韻論的考察」(『広島女学院大学論集』第22集, pp.91-109, 1972)をあわせて参照されたい。